

発表タイトル	和辻哲郎のグローバル倫理学
発表者所属名	国際日本研究専攻
発表者氏名	アントン・セビア

本発表の目的は、和辻哲郎の『倫理学』とそれに関連する著作における「グローバル倫理学」を明確にすることである。最近、英語圏で、和辻倫理学をグローバルな問題に応用する試みがいくつかなされている。はじめに、本発表ではその実例として、クリストファー・ジョーヌズの「Interman and the “Inter” in International Relations: Watsuji Tetsurô and the Ethics of the Inbetween」とマイケル・マーフィーの「The Critical Cosmopolitanism of Watsuji Tetsurô」を紹介する。これらの研究には大きな可能性が秘められているが、和辻の原文が十分に参照されたとは言えず、それらの中で示された解釈については議論の余地が残されている。そこで、本発表では、上記の研究者たちによる解釈の根拠を日本語原文の中で確認したうえで、それに対する批判や補完を行うことにした。

和辻は『人間の学としての倫理学』、『倫理学』上巻において、個人と社会の「否定的二重構造」を人間存在の根本的構造とする。しかし、『倫理学』下巻において、和辻はより高い次元において循環する二重構造、つまり様々な国民国家と歴史における国際的な場との関係性を取り扱う。そこで、彼は大きな現代問題に衝突する。すなわち、倫理学は、歴史的・文化的特殊性にかかわらず直接的に諸個人を結びつける普遍的な規範に基づくのか、或いは、倫理学は相対的・特殊的な道徳に基づくのか、という問題である。

本発表では、『倫理学』における特殊的契機の検討から始め、間柄を、空間・時間にある身体、および共有された歴史を伴う具体的な環境と結びつけることを試みる。そこで、『倫理学』より早い段階で書かれた二つの論文（1932年代の「国民道徳論」、1938年の「普遍的道徳と国民的道徳」、1958年の「国民道徳の問題」）に着目して、国民道徳と普遍道徳をめぐる和辻の見解を検討し、道徳相対主義の論争に踏み込む。この中で、普遍性と特殊性の統一を可能にする和辻独自の理論を示す。最後に、和辻がそれを世界史とグローバル倫理学の考えの中で、如何に適用しようとしたかを明らかにする。

以上をもって、グローバル倫理学における和辻の応用・限界・可能性を明確にしたい。